鉄道会社ならではのCSRをベースに「道徳

当社がはじめてCSR報告書を発行するにあたり、平成19年3月、CSRに関するコンサルティングを専門とする新日本インテグリティアシュアランス（株）が社長佐藤茂雄にインタビューを行いました。

※社長佐藤茂雄は平成19年4月20日、当社代表取締役CEO、取締役会議長に異動することが内定しています。
（正式決定は、平成19 年6 月下旬開催予定の定時株主総会および取締役会において行われる予定です）

創業精神に立ち返り「選ばれる京阪」へ

新日本インテグリティアシュアランス（株）（以下、「SIAI」）．京阪電鉄は昨年創立100周年を迎えられましたが、創業者が日本の資本主義の父と呼ばれている実業家渋沢栄一氏であることを知りました。渋沢氏は「道徳経済合一説」を唱え、現代にも通じる意義深い言葉を残しています。「仁義道徳と生産利殖は元来共に進むべきものであります」。これは、いわゆる法令遵守のみならず企業倫理や環境経営がこれからの企業経営の重要な課題であるという現在の考え方と共通する部分が多いと思います。また、「われも富み人も富み、而して国家の進歩発達を助ける富にして、はじめて真の富と言い得る」。より多くの人が恩恵を受け、最終的には国家の発展につながらなければならないという意味で、これも、いわゆるステークホルダーを意識した意義深い考え方だと思います。この創業者渋沢栄一氏の経営哲学とCSRをどう考えていらっしゃいますか。

佐藤　当社は昨年11月19日、創立100周年を迎えましたが、原点である渋沢栄一の創業の心に帰ろうと社員に呼びかけています。日本人というのは昔からきっちりとした倫理観というのを持っていたのです。CSRという難しい言葉が使われていますが、昔から日本人がやってきたことだと思っています。単純なことで、「嘘をつくな」「隠し事をするな」「悪いことも良いことも全部報告する」そして「お客さまのことを考えて事業に取り組む」。企業の社会的責任はなにも特別なことではないのです。難しい言葉を使うと、こんがらがってしまう場合もあります。いかに分かりやすく伝えるか、みんなで共有するかを常に意識しています。また、「道徳経済合一説」と渋沢栄一は言っています。つまり私利私欲ではなく、社会のために富を使い、全体によくなればいいじゃないかという考え方です。一方で会社として赤字は許されません。赤字の会社では社会的な富を増していけません。企業の務めとして厳しい姿勢も同時に持たないと、単なるお人よしになってしまうということです。

SIAI．　日常、多くの企業の方とお話ししますが、「CSRの考え方はよく理解できるが現実は甘くない、『道徳経済合一説』が大切だと言っても、やはり利益をあげて自社の経営を安定させるというところが最優先だ」という考え方もあります。この点、いかがお考えでしょうか。

佐藤　お客さまの期待に応えられるような会社を目指すことが社会のためになり、「道徳経済合一説」につながると考えています。そのために当社は昨年新しい経営ビジョン「“ 選ばれる京阪 ”への挑戦」を作りました。選ばれるためには信用を重んじていかないといけません。利益優先の発想ではなく、お客さまのニーズにきちんとお応えする中で、利益を確保していく。われわれは、お客さまから「あの会社は素晴らしい」「あのグループは素晴らしい」と思われることで、成り立っているという姿を目指しています。

SIAI．　京阪グループ新経営ビジョンの基本方針に〈わたしたちは、「人々の暮らしを支え、よりよくすることを使命として、もっと多くのお客さまから選ばれる価値ある京阪グループの創造」に挑戦します〉と書かれています。「人々の暮らし」、あるいは「お客さま」といった言葉で、いわゆるステークホルダーを強く意識されたものになっており、京阪の使命、方針を明確に打ち出しています。これはまさにCSR、あるいは「道徳経済合一説」を示されているものと思います。

魅力づくりと安心づくりを二つの柱に

SIAI．　続きまして、経営ビジョンについてお聞かせ願えればと思います。ビジョン実現のための取り組みとして「京阪エリアの魅力を向上します」というものがありますが、どういった取り組みなのかお聞かせください。

佐藤　大阪の新たな経済・文化の拠点としての中之島を活